

北九州市 発達障害者支援地域 協議会・専門部会

第一部会・支援システム

検討部会（第二回）

2021.8.5 19:00～

本日の予定

※ 20時15分
終了

《事務局説明・確認》30分

導入資料説明・内容確認（一括説明・一括質疑）

※ 第一回の意見をもとに現状把握すべき事項を整理
（ライフステージ別・分野別）

→ 内容に不足等ないか確認、適宜項目追加

（会議終了後、teamsチャットでの追加も可能）

《意見交換》30分

現状把握の方法について、今後の進め方

※ 議論終了次第、閉会

（まん延防止等重点措置の実施に伴い、時間短縮に努める）

〔振り返り〕 第一部会の 目指すもの

① 「中間まとめ」 抜粋（その1）

〔4つの重点課題〕

（地域支援体制の構築）

⑤ 多職種連携の推進

（情報の共有、「基本の手立て」の一貫性確保・確実な引継）



（年齢ごとの課題への対応）

⑦ 幼少期からの早期支援

（子育て環境の整備、構造化・コミュニケーション支援等）

⑧ 学齢期児童生徒の支援

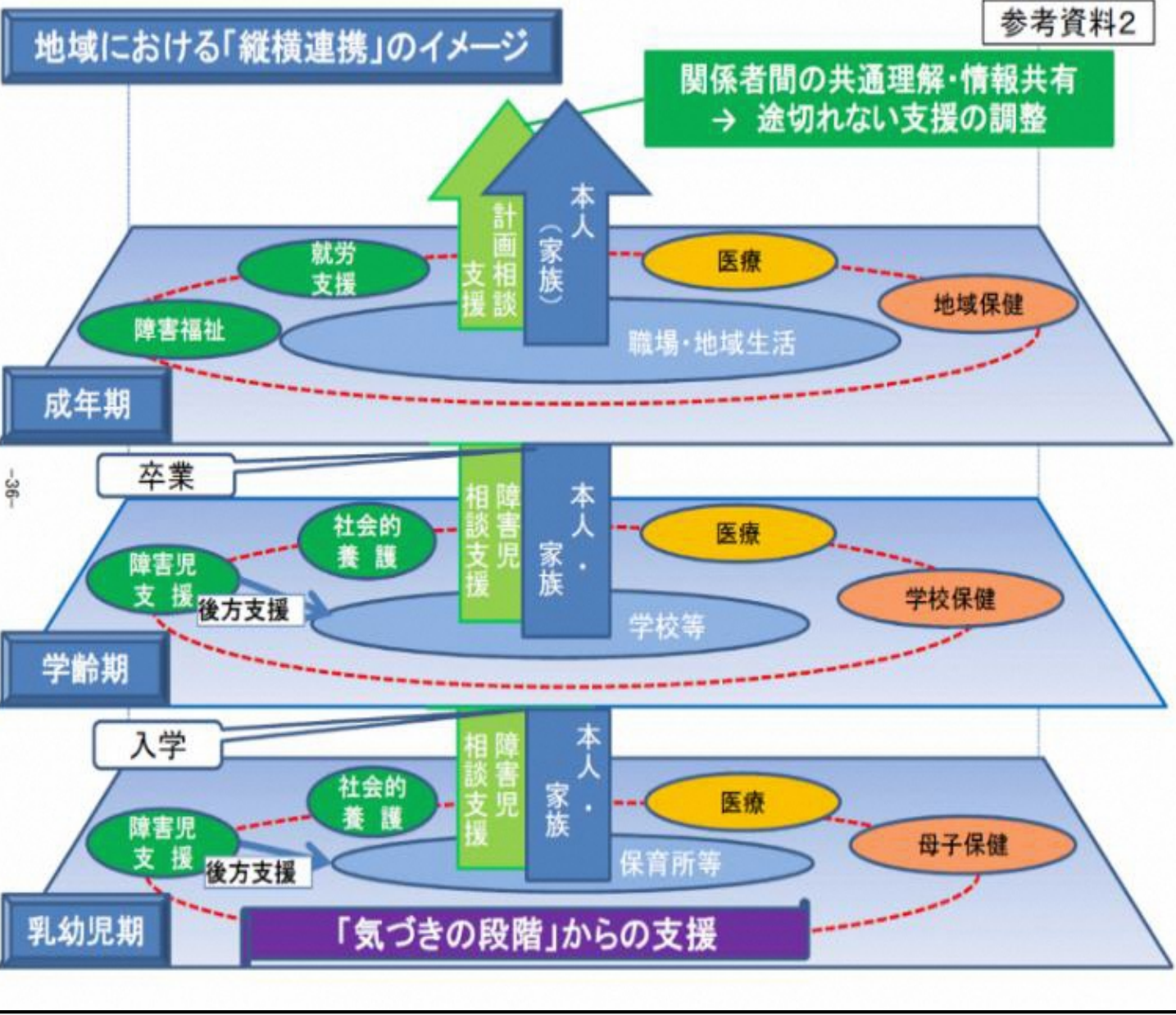
（自己理解・ライフスキル、思春期の“揺らぎ”への対応）

⑨ 青年期から成人後の支援

（就労支援、生活支援、ひきこもり・二次障害への対応）

（※ 取り組みの視点）

- ・ 健診や治療、相談などの機会を活かした「**特性の気付き・理解**」
- ・ 当事者の生活を支える「**基本の手立て**」の実施と次のステージへの確実な**引継**



〔振り返り〕

第一部会 の 目指すもの

多職種連携、
ライフステージを
通した支援の
イメージ

(地域における「縦横連携」)

障害児支援の在り方に関する検討会報告書・概要版（平成26年7月）

→ 上記にインフォーマルな社会資源を追加（当事者交流・保護者交流・地域交流など）

〔情報共有〕 他の2部会 の進捗状況

《調査・骨格検討部会》会議2回開催

- ・「基本の手立て」の定義まとめ（※別紙）
- ・「基本の手立て」の普及状況について実態調査企画
（質問紙形式 → 福祉、教育、医療、専門機関、
家庭・当事者）

《第二部会（強度行動障害支援検討部会）》会議2回開催

- ・部会長基調講演「7つの提言」（※別紙）
- ・障害福祉サービスのデータ分析
→ 強度行動障害の人は864人（在宅269人、入所486人）
- ・在宅生活の269名を対象に実態調査企画
（質問紙形式 → 家庭での状況等）
- ・他都市先進事例の学習（ゲスト講師による講演）

《参考》 調査・骨格検討部会「基本の手立て」

発達障がいのある人の日常生活を支える「基本の手立て」の定義

【大きな定義】

個の障がい特性に応じた、様々な生活場面における
根拠ある支援ツールの導入及び生涯にわたる支援実践。

【順序性で整理した下位の要素】

①個の困り感の気づきの実態把握の方法、特性を理解するアセスメント・ツール

…各現場での当事者の実態把握、心理学的な検査ツール

②各障がい特性に適した支援を実践するための関連機関の連携・活用

…医療機関の相談、福祉・教育・労働・家族等との連携、専門機関からの助言、当事者・家族を支える相談機関等

③一般的な各障がい特性に対する配慮方法

…聴覚過敏に対する刺激の除去、明確な見通しの提示等

④日常生活の各生活領域（身辺自立、コミュニケーション、学習、職業、社会性（集団生活）、余暇等）を支える支援ツール

…視覚的な手順がかり、コミュニケーション・カード、スケジュール等

⑤個の特性に応じた支援の検討過程

…個別の支援（指導）計画、PDCAサイクルの支援体制等

⑥専門的な手法

…TEACCH、応用行動分析学、PECS、感覚統合療法等

《参考》 第二部会・部会長提言（基調講演より）

強度行動障害のある人を地域で支えるには

提言① 実態調査の実施

… 当事者と家族、支援者の抱える困難を明らかにする

提言② 地域協議会の設置

… 開かれた議論のもとで、強度行動障害に係る地域支援体制の全体構想を策定する

提言③ アウトリーチ支援チームの設置

… 家庭、学校、福祉、医療の現場に即時介入、早期改善・指導育成

提言④ 拠点施設の整備

… 強度行動障害のある人を一定期間受け入れて集中支援—を行う施設を整備

提言⑤ 生活の場の確保

… 必要な支援を受けながら地域で生活できる場の確保 ～ 入所施設、グループホーム、支援付き単身生活

提言⑥ 教育と普及啓発の推進

… 多職種と保護者のための体系的かつ実践重視の教育や自閉症支援の普及啓発

提言⑦ 必要な人材確保とインセンティブ制度の導入

… 受入施設に対する必要な職員の加配、職務に応じた報酬の加算

《多職種連携の課題》

現状把握すべき 事項の整理 1

(共通の課題)

《主な意見・問題提起》

- ・ 連携は診断に繋いで終わりではなく、その人に必要な「良い支援」にまで繋いでいくことが重要。
- ・ 本人と家族が連携に参加できているか、その人の思いや願いが反映できているか検証すべき。
- ・ 連携には役割分担の明確化(何をすればよいか/何を頼みたいか)と情報の共有(どこで何ができるか)が必要。
- ・ 専門職の異なる専門性を活かしてつなぐ「調整役」が重要。
- ・ 困難ケースを専門機関に一方的につなぐのではなく、内容を精査し、それぞれの役割の限界を知ることが重要。
- ・ 多職種連携の前に、教育や福祉などの機関・施設内でそもそも連携が取れていないと感じるときがある。

《多職種連携の課題》

現状把握すべき 事項の整理 1

(共通の課題)

《重点課題/現状把握すべき事項》

- ・ 連携のキーパーソン（誰が調整役か）や連携ツールを検証（内容・記載事項、活用状況）。
- ・ 連携の「流れ」について（いつ、どこ（誰）が起点となり、どこ（誰）へ繋がるか）

〔現状把握における着眼点〕

- ① その人に必要な「良い支援」にまで繋いでいるか。
- ② 本人や家族の思いや願いが反映できているか。
- ③ 役割分担が明確であるか（何をすればよいか/何を頼みたいか）
- ④ 連携先機関の機能に関する情報が開示され、共有されているか（どこで何ができるか）
- ⑤ 組織・職員間で、多職種連携の仕組みやツールについて情報が共有されているか

《多職種連携の課題》

現状把握すべき 事項の整理 2

(地域医療連携)

学齢期・特に小学生

《主な意見・問題提起》

- ・ 重症や緊急ケースは療育センターで、落ち着いたケースは地域の医療機関で診る医療連携を進めたい。
- ・ 中～高校生は地域の精神科でお願いできるようになってきたが、小学生は難しい。小児科医との連携を進めたい。
- ・ 小児科医は何ができるのか、何をしたら良いかわからない。経過観察や保護者への助言内容も分からないままでは、患者を引き受けることができない。
- ・ かかりつけ小児科医が、保護者へのアドバイス内容や専門的支援へのつなぎ方を学ぶスキルアップの仕組みが必要。

《多職種連携の課題》

現状把握すべき 事項の整理 2

(地域医療連携)

学齢期・特に小学生

《重点課題＝現状把握すべき事項》

- ・ 小児科医向けの研修メニュー(市内)、実施状況、受講状況等
- ・ 保護者への助言内容、支援のためのツールや情報
- ・ 治療内容の具体的共有方法、困ったときの相談体制
- ・ 小児科医と学校や福祉事業所との情報共有の仕組み、方法

《多職種連携の課題》

現状把握すべき 事項の整理 3

(学校での支援)

幼児～小中学生

《主な意見・問題提起》

- ・ 学校では診断名に拘らず、こういった手立てで子どもの困り感が減るのか、こういった支援が適切であるか日々探っている。
- ・ 自分の手立てがどうだったか、環境はどうだったか、目の前の子どもから学んでいる。
- ・ 学校関係者が他の関係機関の役割を把握できていない。このため、どうやって関係機関へ支援をお願いしたらよいか、先生方にお伝えしている。
- ・ 学校の先生は困難ケースを専門機関へ一方的に押し付けがちになる。それぞれの機関の限界を知ることがまだまだ広がっていない。
- ・ 上手に連携を取り、コーディネートする力をつける必要がある。

《多職種連携の課題》

現状把握すべき 事項の整理 3

(学校での支援)

幼児～小中学生

《重点課題＝現状把握すべき事項》

- ・ 学校における子どもの「困り感」のアセスメント、支援の効果検証の方法
- ・ 教員向けの研修メニュー(市内)、実施状況、受講状況等
- ・ 校内におけるチーム支援(チーム学校)及び校外関係者とのチーム支援の事例
- ・ 早期支援コーディネーターの支援内容、支援事例

《多職種連携の課題》

現状把握すべき 事項の整理 4

(大学での支援)

青年期～成人後

《主な意見・問題提起》

- ・ 発達障害のある学生は、生きづらさをずっと抱えながら今に至っている。
- ・ 学生の経験した小中学校や幼児期のいじめ、ひきこもり、学習困難の話を知ると、その時に支援できていたらもっと違ったのではないかと思うことがある。
- ・ 大学生活の支援のため、保護者や高校の担任が入学後に保健室へ協議に来られるケースがある。幼少期から保護者が子どもの特性をよく理解して関わっており、このような学生はトラブルなく大学生活を送っている。
- ・ 大学生になるとアイデンティティもしっかりしてきて、悩みながらも前に進もうとする。
- ・ 最終的には進路保証が大切。自分で生きていけるように支援する必要があるが、一緒に考え支えてくれる人がいれば、彼らはまた前に進んでいける。

《多職種連携の課題》

現状把握すべき 事項の整理 4

(大学での支援)

青年期～成人後

《重点課題＝現状把握すべき事項》

- ・ 大学入学時の引継事項、情報共有内容
- ・ 大学生の「生きづらさ・困り感」の気付き・理解の方法、支援の手立て
- ・ 卒業後の進路・自立生活までを支える伴走型支援者
- ・ 気兼ねなく悩みを話せる場、同じ悩みを抱える仲間との繋がり

《多職種連携の課題》

現状把握すべき 事項の整理 5

(保護者支援、家庭・
地域での支援)

幼少期～成人後

《主な意見・問題提起》

(保護者)

- ・ 困っている中で最初に助けてもらったのは親の会だった。専門家よりも経験者の保護者の言葉が一番支えになり、解決に繋がる。
- ・ 支援の仕組みの中に、親の会や学習会などに繋ぐ仕組みがあると助かる。
- ・ 放課後等デイサービスの取り組みや対応の仕方を保護者が知ることができる
とよい。

(子ども自身)

- ・ 小学校では、周りの子どもが本人のことをわかってくれて、支えになってくれた。支えてくれる子どもが多いと、子どもも落ち着いて安心できる。
- ・ 子どもが小さいときに、必要な手立て・配慮のもとで地域での集まりなどに参加出来たら、ソーシャルスキルトレーニングにもつながると思う。
- ・ 子どもが自ら安心して話を出来る人、この人なら大丈夫、という存在が必要。
中学生からは本人の気持ちを直接聞くことが重要。

《多職種連携の課題》

現状把握すべき 事項の整理 5

(保護者支援、家庭・
地域での支援)

幼少期～成人後

《重点課題＝現状把握すべき事項》

- ・ 親の会、保護者向け学習会、ペアレントメンターの活動状況
- ・ 保護者向けピア活動等の情報を保護者へ伝える仕組み
- ・ 放課後等デイサービスの保護者支援・情報提供
- ・ 子ども集団の中での交流・活動の機会の確保、集団参加の工夫
- ・ 子どもが直接相談できる場、相談相手

1 総論（全世代、各分野共通の課題）	2 各論／分野別課題
<p>（重点課題/現状把握すべき事項）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 連携のキーパーソン（誰が調整役か）や連携ツールを検証（内容・記載事項、活用状況）。 ・ 連携の「流れ」について（いつ、どこ（誰）が起点となり、どこ（誰）へ繋がるか） <p>〔現状把握における着眼点〕 ※ 意見交換事項</p> <ol style="list-style-type: none"> ① その人に必要な「良い支援」にまで繋いでいるか。 ② 本人や家族の思いや願いが反映できているか。 ③ 役割分担が明確であるか（何をすればよいか/何を頼みたいか） ④ 連携先機関の機能に関する情報が開示され、共有されているか（どこで何ができるか） ⑤ 組織・職員間で、多職種連携の仕組みやツールについて、情報が共有されているか 	<p>（1）地域医療連携（学齢期～特に小学生）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 小児科医向けの研修メニュー（市内）、実施状況、受講状況等 ・ 療育センターと地域医療機関のチーム支援事例（精神科との連携事例を含む） ・ 治療内容の具体的共有方法、困ったときの相談体制
	<p>（2）学校等での支援（学齢期 幼児～小・中）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学校における子どもの「困り感」のアセスメント、支援の効果検証の方法 ・ 教員向けの研修メニュー（市内）、実施状況、受講状況等 ・ 校内におけるチーム支援（チーム学校）、及び学校と地域のチーム支援の事例 ・ 早期支援コーディネーターの具体的支援内容
	<p>（3）大学での支援（青年期）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 大学入学時の引継事項、情報共有内容 ・ 大学生の「生きづらさ・困り感」の気付き・理解の方法、支援の手立て ・ 卒業後の進路・自立生活までを支える伴走型支援者 ・ 気兼ねなく悩みを話せる場、同じ悩みを抱える仲間との繋がり
	<p>（4）保護者支援、家庭・地域での支援（幼少期～成人後）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 親の会、保護者向け学習会、ペアレントメンターの活動状況 ・ 保護者向けピア活動等の情報を保護者へ伝える仕組み ・ 放課後等デイサービスの保護者支援・情報提供 ・ 子ども集団の中での交流・活動の機会の確保、集団参加の工夫 ・ 子どもが直接相談できる場、相談相手

現状把握の 方法について

〔方法〕

- ・事例検討

〔進め方〕

- ・部会構成員より発達障害児者の支援事例発表
（多職種・複数チームによる支援）
（各構成員が1ケース発表 所要時間15分程度）
- ・部会構成員による議論
→ 発表事例をもとに、今後必要な支援を検討

〔事例発表に盛り込む内容〕

- ・ ケース概要、連携のキーパーソン、連携先
- ・ 使用ツールの紹介（情報共有に使用したツール等）
- ・ 検証（本日共有した「現状把握すべき事項の整理」に即して検証）

現状把握の 方法について

〔事例発表の構成案〕 ※地域医療連携の場合

- 1 ケース概要
- 2 連携の調整役
- 3 連携ツール（様式及び内容、記載事項、使い方）
- 4 連携の流れ（いつ、どこ（誰）が起点となり、どこ（誰）へ繋がるか）
- 5 連携支援の検証

【共通事項】

- ① その人に必要な「良い支援」にまで繋いでいるか
- ② 本人や家族の思いや願いが反映できているか。
- ③ 役割分担が明確であるか
- ④ 連携先機関の機能に関する情報が開示され、共有されているか
- ⑤ 組織内で、多職種連携の仕組みやツールについて情報が共有されているか

【個別事項】

- ① 小児科医向けの研修メニュー（市内）、受講状況等
- ② 保護者への助言内容、支援のためのツールや情報
- ③ 治療内容の具体的共有方法、困ったときの相談体制
- ④ 小児科医と学校や福祉事業所との情報共有の仕組み、方法

今後の予定

《R3.9～11月》

事例検討(web会議) ※ 3回程度 会議開催

→ 事例を基に、今後の取組について検討

- ・多職種連携の重点施策（共通事項）

- ・ライフステージ別の重点施策

（幼児期、学齢期、青年期～成人後）

※ 新規事業の前に、既存事業の内容等の工夫、
情報共有、情報発信等をまず検討

《R3.12月》

議論のまとめ